



Title	キリスト教語学書の展開：ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	語文. 2018, 110, p. 52-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

キリスト教語学書の展開

—ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード—

岸 本 恵 実

1. はじめに

イエズス会の東アジア宣教は、1549年に日本、1583年頃から中国、1615年頃からベトナム（コーチシナ）と本格的に開始され、ほぼそれに伴う形で各現地語の研究が進められた。本稿の目的はその成果の一部である三つの刊本、イエズス会士ジョアン・ロドリゲス (João Rodriguez (1561/1562-1633/1634)) による『日本語文典』(*Arte da lingoa de Iapam*, 1604-08長崎刊 以下『大文典』) および『日本語小文典』(*Arte breue da lingoa Iapoa*, 1620 マカオ刊 以下『小文典』) と、同じくイエズス会士であるアレクサンドル・ド・ロード (Alexandre de Rhodes (1591-1660)) による『アンナンまたはトンキンの言語の短い解説』(*Linguae Annamiticae seu Tunchinensis brevis declaratio*, 1651ローマ刊 以下『ベトナム語概説』) の分析を通じて、キリスト教語学書にみられる日本語研究が、中国語・ベトナム語という東アジアの他の現地語研究と接し、相対化していった過程を示すことである。なお、当時、日本語・中国語・ベトナム語とも地域差が大きかったと考えられるが、本稿では大きく三種類の言語に分けて論ずる。

キリスト教語学書の成長性については、土井 (1971) が、ロドリゲスの『大文典』から『小文典』へのラテン文法の枠組みからの脱却、『落葉集』(1598刊) における部首引きの小玉篇の追加などの例をあげて指摘している。その後、『大文典』から『小文典』への変化について豊島 (1989) は、日本語の文語（古文）に遡り得ることを正格とみなして動詞活用論を書き換えたことを中心に論じている。また、ロドリゲスの著作に同時代の中国語・朝鮮語に関する記述があることは、土井 (1982) および福島 (1973) (1983) がすでに言及している。土井 (1982) では、ロドリゲスの『日本教会史』(*Historia da Igreja do Japão*, 1620-1633頃執筆) とニコラ・トリゴー (Nicolas Trigault (1577-1628)) による『西儒耳目資』(1626刊) の中国語のローマ字表記の比較を行っており、『小文典』は対象とされていない。福島 (1973: 257-258) では『小文典』において中国語原音がはじめて見られることが例示されており、福島 (1983: 285-301) では中国史料・朝鮮史料に基づき日本

追放後のロドリゲスの動静を描き出しているものの、言語の分析が主となっているわけではない。

また、ロードは当初日本宣教を志し日本語を学習していたことから、彼が使用したベトナム語のローマ字表記は、日本語のローマ字表記に影響を受けたと言わされてきたが (Bernard-Maître (1939: 19) など)、キリスト教語学書との関係を示す確証は指摘されていなかった。稿者は先の発表にて、『ベトナム語概説』と合わせて印刷されたロードの『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』 (*Dictionarium Annamiticum Lusitanum, et Latinum*, 1651ローマ刊) とキリスト教語学書類との成立上の強い関係性は認めにくい一方、『ベトナム語概説』の方はロドリゲスの『小文典』と類似した記述がみられることを指摘したが、本稿では、『大文典』から『小文典』へ、さらにロードの『ベトナム語概説』への展開として捉え直したい。

なお資料の引用は、公刊された邦訳があるものは主としてそれに拠り、必要と思われる箇所のみ原文を引用した。引用文中の下線は、すべて稿者による。

2. ロドリゲスによる、日本語以外の現地語への言及

2. 1. ロドリゲスの略歴と著作

本稿に関連するロドリゲスの略歴と著作を、土井 (1971)・クーパー (1991) によりつつ記す。

1561年頃ポルトガル北部ペイラ地方セルナンセリエに生まれたロドリゲスは、1577年に来日し、1580年イエズス会入会、臼杵・府内などで1595年頃まで、ラテン語・日本語、哲学・神学を学んだ。日本語に熟達し1581年頃から会の通訳を務める。1596年マカオにて司祭となり、1598年より財務担当司祭を務めた。1604年長崎にて著書『大文典』が刊行されるも、1610年マカオに追放され、1613-1615年中国視察の任にあたる。1620年マカオにて『小文典』が刊行され、その後『日本教会史』執筆にあたるも未完のまま1633年頃マカオにて死去した。

ロドリゲスの主要な著作は、上にもあげた三点である。内容と、序文などに書かれた編纂の目的とを簡略に記す。

①『大文典』。標題紙・允許状・認可状・緒言・例言4丁と、本文240丁からなる。ヨーロッパやインドから来るイエズス会士が日本語をより容易に学習できるよう、活用や品詞論のほか、正確かつ上品に話すことを教える規則と方式を平易に説明することを目指したもの。

②『小文典』。標題紙・允許状・認可状・読者へ・目次4丁と、本文96丁からなる。

日本語の初心者のために、『大文典』を要約し、『大文典』への手引きとしたもの。高瀬（2001：436）が述べるように、マカオコレジオにおける日本語授業の開設に合わせて刊行されたとみられる。

③『日本教会史』。マドリッド王立歴史アカデミー本（自筆、断簡）とアジュダ文庫本（18世紀転写本、欠本）が現存する。日本の正確な情報および教会史をヨーロッパに提供することを目指し、アジア・日本の総論と、ザビエル以降1624年までの日本宣教史からなる。

次に、日本追放前に刊行された『大文典』と、追放後の『小文典』『日本教会史』に分けて変化を見していく。

2. 2. 『大文典』の記述

『大文典』において、中国・中国語に言及した箇所は数多いが、ほとんどが（1）のような日本・日本語の歴史を説明する中での記述であり、同時代の事項や言語を取り上げることは少ない。同時代に関する事項としては、（2）のような度量衡や通貨に関する記述などがある。

（1）漢字の音読みについて

日本の漢字即ち意字は、「和、漢（Va, Can）’、又は、‘漢、和（Can, Va）’という一般的な名称で呼ばれる二様の読み方を持ってゐる。‘漢、和’は我々が支那語・日本語といふものに当る。（中略）これら二種類の中の一つを‘こゑ’とか‘消息の詞（Xōsocuno cotoba）’とかいひ、普通にはそれで各意字即ち漢字を呼んでゐる。それは中国で名附けられたものであって、固有の支那語である。それを日本人はできる限り支那人の真似をしながら日本流に発音してゐる。支那人の持つてゐる文字や綴字で、日本人の発音し得ないものが多数あるが、それは日本の発音には缺けてゐるからである。例へば、L がそれであり、その他咽喉や口の中で発音されて、綴字に写される明瞭な声といふよりも音響である為に、我々の文字でさへ書く事のできないものがある。

（卷一「日本語ですべてのものを呼び分ける‘こゑ’と‘よみ’の二種類に就いて」
58v 邦訳233-234頁）

（2）斤の交換率

日本の斤は量られる物によって違ふ。

25両は‘絲’（Ito）、‘木綿’（Quiuata）などの一斤である。（中略）

支那では Ichiriō (一両) が重さの一両である。(中略)

日本における支那の斤量

Iquin (注 Icquin の誤。) (一斤)。 1 cate. 16両。即ち、20 Arrateis. (中略)

Fiacquin (百斤)。 1 pico. 1600両。120 Arrateis. (中略)

○支那船で生糸その他の反物を計るのに使ふ棹秤の斤量は、一斤が十五両。1 pico が千五百両の重さに勘定される。

(卷三「棹秤で量る重さ、斤に就いて」218v-219 邦訳779-780頁)

同時代の中国語音を併記しているのは、(3) の 1 か所程度であった。

(3) 「天竺」の中国語よみ

○支那には一般的な学派が三つあって、(中略) その第一は Fotoques (仏) の教であって、‘天竺’ (Tengicu) と呼ばれ、支那では Tienquo と呼ばれてゐるシャムの土着王、Xaca (釈迦)、又は、Xequian (注 釈迦牟尼のサンスクリット Śākyamuni の変化か。) がその創始者である。

(卷三「支那の年代数と、最も注意すべき若干の事件」235v 邦訳844頁)

「天竺」の表記は、その後ロドリゲス自身の『日本教会史』でも「Tienchô」や「Tiencho」とあって一定していない。『西儒耳目資』では「天」「竺」は「tiēn」「chô」とあり、『大文典』とも『日本教会史』とも異なっている。

このほか『大文典』では、(4) のようにインドの現地語（具体的な言語の種類は不明）に言及している箇所があるが、全体として、日本語以外の現地語への言及はごく少ない。

(4) 不定法の形

○日本語の不定法には固有の形がなくて、色々な言ひ方によって補はれる。

(中略) ここで知って置くべきことは、直説法に特定の助辞を加へたものが使はれるといふことである。(稿者注 以下「読むは易し」「有るに似たり」などの例をあげる) (中略) さういふ例が他の国語にあることを知らない。ただ印度地方のある国民は、一定の助辞を伴った不定法ばかりを用ひて話すのである。

(卷一「不定法に就いて」20-21v 邦訳92頁)

2. 3. 『小文典』『日本教会史』の記述

2. 3. 1. 中国語に関する記述

『小文典』は、『大文典』に比べ全体の分量が半分以下に要約されているが、同時代の中国語の発音に言及した箇所が増えている。これはロドリゲスが日本追放後、中国語を本格的に学んでいたことに加え、読者として中国語を知るマカオのイエズス会士を想定していたためと考えられる。

『大文典』では（1）のように L 字について、中国語の L が日本語には欠けていると記されていたが、『小文典』では、日中の対照がより明確にされている。

（5）『小文典』の日本語・中国語発音比較

Carece sua pronunciaçam da letra, L, & tambem de, R, dobrado; & os Chinas ao contrario tem, L, & nam tem, R.

（日本語の発音には文字〔音〕L がなく、二重字の R〔音〕もない。中国の人びとには、逆に L はあるが、R はない。）

（卷一「日本語を書き表わすのに用いるわれわれのアルファベット字」9v 池上訳:上60頁⁽²⁾）

さらに『小文典』では、（6）のように中国語の発音を併記する箇所が増えている。

（6）『小文典』の中国語ローマ字表記「漢、呉、唐」

中国語の文字〔漢字〕のなかには、日本人のあいだで三種の Coye つまり三種の中国語読みの行われている文字が多数ある。これら三種の読みは、日本でそれぞれ Can (漢)、Go (呉)、Tō (唐) と呼んでいるかつての中国の名高い三つの王朝・時代すなわち Canno yo (漢の世)、Gono yo (呉の世)、Tōno yo (唐の世) に対応するものである。ところで中国の人びとはこれら三つの王朝をそれぞれ Han, Gu, Tan と言っているのであるが、それぞれの王朝が〔中国を〕統治した時代によって Coye の音つまり読みの異なる文字が多数あった。

（第三章「日本人のあいだに見られる一部の文字の三種の Coye (音) について」73v 池上訳:下118頁）

『西儒耳目資』の表記を〔 〕に併記すると、漢 Han [hán] 呉 Gu [gū] 唐 Tan [tām] であり、『小文典』には声調符号がないこと、「唐」の m が n になっ

ているなどの違いがある。『小文典』全体に見られる中国語の異なり語数・漢字数は、(7) に示す11語・14字である。福島 (1973: 257) が指摘しているように、巻三のうち「百官」の、役職名が列挙されている中に多い。

(7) 『小文典』の中国語ローマ字表記

(7-1) 中国語のローマ字表記が併記された語

「漢」(73v, 83)「吳」「唐」(73v)

「吏部」「礼部」「戸部」「兵部尚書」「刑部尚書」「工部尚書」(89v-90v)

「州」「府」(92v)

(7-2) 『西儒耳目資』との比較に基づく上の字の分類

[] は『西儒耳目資』の表記

ローマ字が異なり、声調符号がない字：

唐 Tan [tâm] 尚 xan [xâmn] 工 Cum [kûm] 吏 Ly [lî] 礼 Ly [lî]

声調が異なる字：

書 xû [xû]

声調にゆれがある字：

部 pû / pù [pù]

声調符号がない字：

漢 Han [hán] 吳 Gu [gû] 戸 Hu [hù] 兵 Pim [piñm] 刑 Him [hiñm]

州 Cheu [chêu] 府 Fu [fù]

『西儒耳目資』の表記と比べると、土井 (1982) が調査した『日本教会史』に見られる中国語と同様、声調符号を欠くなど、類似してはいるが異なっている場合が少くない。

ロドリゲスの学んだ中国語はリッチら中国イエズス会士と同様、Mandarin と称された標準語的な中国語であったと思われるが (Zwartjez (2011: 284-286))、1620年頃、中国イエズス会において中国語の音韻・方言研究がどの程度なされていて、さらにそれをどの程度、ロドリゲスが受容していたか明らかではない。古屋 (1989)・Zwartjez (2011: 287) によると、中国ではトリゴーの『西儒耳目資』以前に、マテオ・リッチ (Matteo Ricci (1522-1610) らが1598年頃中国語の声母の有声・無声、五つの声調の区別をほぼ確定させていたというが、ロドリゲスの表記はリッチによる『西字奇蹟』(1605刊、聖書の部分的漢訳にローマ字を併記したもの) のローマ字表記とも一致するようではない。ロドリゲスの表記がトリゴーとも

リッチとも一致しない原因は、1620年頃、中国語のローマ字表記が統一されていなかったことにあるのかもしれないが、ロドリゲスは『小文典』『日本教会史』において、中国語の音注は中国語を知る読者に有用と考えた一方、二書とも中国語学習書ではないので、さほど厳密でなくてよいと考えていたように見える。特に『小文典』の中国語音注は『日本教会史』と比べるとごく少数であり、日本語理解のための補足に過ぎない。

ただ『小文典』では、このほか中国語について、冒頭の日本語の学習法を説いた箇所に、以下のような記述のあることが注目される。

(8) 中国イエズス会の中国語学習法

日本語を学びこれに熟達する方法には主なものが二つある。その一つはこの地の人びとと日常的に交際してこのことばを用い、人びとがさまざまな事柄について話す時の種々の表現・言葉遣いにおこたりなく注意を払い、自然にこれを習得する方法である。(中略 稿者注 これに続き、第二の学習法として、ラテン語・ギリシャ語・ヘブライ語を学ぶ時のように、教師の指導のもと文法書を用い、文法規則から学ぶ方法があげられる)

第一の学習法のほうが確実で、日本語らしく話せるようになる。これは〔この方法によって〕ことばを身につけてゆく過程が、無意識のうちに習慣をわがものにするのに似ているからで、これまでもヨーロッパ出身のわが会〔イエズス会〕の多くの人びとや、日本人のなかで暮らしているほかの国の人びとに現実に見られるとおりである。たとえば朝鮮の人びと。この人たちはことばの点ではこの地に生まれ育った人のように見える。

しかしながらこの学習法にもそれなりに不便・難点はある。しかもそれは聖職にある者にとっては小さくないのである。なぜならば、この方法のほうが時間が多く必要とし、當時この地の人びとのなかにいて絶えず交際していなければならぬし、すくなくとも並外れた努力をしないかぎり、通常より短い期間で日本語に熟達してわれわれの任務を果せるようにはなれないからである。なお中国宣教区のわが会の神父や修道士らはこの方法を用いた。

(卷一「日本語の学習と教授にふさわしいと思われる方法について」2v 池上訳:上30-32頁)

ロドリゲスによると、中国のイエズス会士たちは教師と文法書によって学ぶのではなく、日常的に中国人と会話する方法で中国語を自然に習得する方針を採ったという

のである。ロドリゲス自身も、その方法で中国語を習得した（教師と文法書による第二の学習法は、そもそも選択できる状況になかった）と考えられる。

2. 3. 2. 朝鮮語に関する記述

『大文典』と『小文典』に朝鮮語そのものに関する記述はないが、(8)の『小文典』に、日本語の第一の学習法の例として日本にいる朝鮮人の日本語学習があげられていた。ルイズデメディナ (1988) によると、文禄・慶長の役により多くの朝鮮人が日本に連行され、1594年には日本語を習得した朝鮮人によって祈祷書が朝鮮語に翻訳され、2000人以上が入信したり、1610年には長崎に朝鮮人信徒団が設立され、長崎に教会を建設したりした記録があることから、ロドリゲスも朝鮮語に接する機会が少なくなかったと思われる。⁽⁴⁾ ロドリゲスが朝鮮語の発音や文法をかなり知っていたことは、以下 (9) の『日本教会史』からも明らかである。

(9) 朝鮮語と日本語（とくに中国地方）の類似について

国家の形態をなさず、国王を持たない今まで日本の初期に住みついた人が、高麗 Cōray に面している中国 Chūgocu のその地方へ〔高麗から〕行ったことが考えられる。というのは、高麗 Cōray のその王〔国〕もシナとほぼ同じくらい古くて、その国も一つの潮で渡れるほど近いからである。そのために、中国 Chūgocu のその地方にいる日本人は、粗雑な話し方や、音調が日本の他の地方とは異なっていて、コーリア人の話し方や音調に非常に類似している。 また、今日通用している文法の形式や品詞の上で、日本固有の言語は、コーリアの言語〔朝鮮語〕と非常に似た点を持っている。

（第一巻第三章第一節「如何なる民族が日本の諸島に移り住んだか」邦訳上 174頁）

ロドリゲスが『小文典』において朝鮮語に言及しなかったのは、朝鮮語の知識が中国語に比べて不十分だった可能性もあるが、『小文典』の対象者が主としてマカオの日本語初学者であって、組織的宣教が行われていない朝鮮の言語への言及は不要とみなしたのだろう。

このようにロドリゲスは外国語学習について、日本での同僚のイエズス会士による日本語学習だけでなく、日本での朝鮮人による日本語学習、中国でのイエズス会士による中国語学習の実例をいくつも観察することになった。そして宣教師の日本語学習では、第二の学習法を採用し、ふさわしい教師・書物・順序で学ぶべきであ

るという結論に達したのである。⁽⁶⁾

3. ロードによる、ベトナム語以外の現地語への言及

3. 1. ロードの略歴と主な著作

Phan (1998) によると、ロードの略歴は以下の通りである。1591年フランス・アヴィニヨンに生まれ、1612年イエズス会に入会したのち、1619-1624年ゴア、マラッカ、マカオに滞在し日本宣教を志すも、1624-1626年にコーチシナ、1627-1630年トンキンに派遣される。1630-1640年マカオコレジオにて神学を教授し、1640-1645年再びコーチシナにて宣教を行う。1645年ベトナム宣教の援助を求めてローマへ向かい、1651年ローマにて『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(『ベトナム語概説』を含む)とラテン語・ベトナム語対訳『カテキズム』を刊行する。その後1654年ペルシャに派遣され、ベトナムに戻ることなく、1660年にペルシャ・イスパハンにて死去した。著作は刊行されたものだけでも、上述の辞書・カテキズムのほか、*Histoire du royaume de Tunquin* [トンキン王国史] (1651リヨン刊)、*Divers voyages et missions* [幾つもの旅と宣教] (1653パリ刊)など複数が知られる。

上のようにロードは来日することはなかったが、1623年マカオで日本語を学習したと述べており (Rhodes (1653: 57))、高瀬 (2001: 435-437) によると、ロドリゲス『小文典』が刊行された1620年から少なくとも1624年まで、マカオコレジオで日本語の授業が行われた記録があるから、ロードも生徒の一人だったと考えられる。またロードはマカオ滞在中、中国語も学んだと思われる (Phan (1998: 45))。

またベトナムでは、コーチシナ宣教の際ホイアンの日本町で活動したこと、日本を追放された日本人イエズス会士 (斎藤パウロ (1576-1633) ら) が同僚にいたことから、日本語を実際に使う機会は少なくなかったと考えられる。⁽⁷⁾

次に、川本 (1989) および Fernandes and Assunção (2014) (2017) を参考に、辞書の基本書誌を記す。全体の構成は、標題紙 1 ページ、序文 6 ページ (『布教聖省の諸枢機卿へ』『読者へ』) と、『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』900 コラム (450 ページ、約 6,000 見出し) ⁽⁸⁾ と正誤表 5 ページ、辞書の『ラテン語索引』100 ページ、『ベトナム語概説』31 ページ (文字と音節、声調と符号、名詞、代名詞、動詞、その他の不変化の品詞、構文論を含む) からなる。

辞書の目的は「読者へ」に、「ベトナム語について詳しく述べ、誰もがよりよくベトナム語の書物を容易に理解し、翻訳できるようにするため」「ベトナム人のた

めに便利であるようにラテン語・ポルトガル語を付け加えた」と書かれている。また、イエズス会士ガスパル・ド・アマラル (Gaspar do Amaral (1594-1646)) のベトナム語・ポルトガル語辞書と、アントニオ・バルボーザ (António Barbosa (1594-1647)) のポルトガル語・ベトナム語辞書 (二辞書とも現存は確認されていない) を基にしたとも書かれている。

3. 2. 『ベトナム語概説』の日本語・中国語に関する記述

『ベトナム語概説』は辞書と成立事情が異なり、Jacques (2002) により、先にベトナムで宣教し、ロードのベトナム語指導も行ったイエズス会士フランシスコ・デ・ピナ (Francisco de Pina (1585-1625)) の草稿を元にしていることが明らかにされている。しかしこれを示す (10) (11) の日本語・中国語に言及した箇所は、現存するピナ草稿の写本ではなく、ロードが付加した可能性がある。なお、『ベトナム語概説』において言及されているベトナム語以外の現地語は、中国語と日本語のみである。

(10) 中国語・ベトナム語・日本語の文法比較

VICINIORA Orientali plagae idiomata praecipue verò Cinense & Tunchinense, & ex parte etiam Iaponense, artem illa addiscendi habent à nostratibus linguis longè diuersam: carent enim omnino generibus: declinationes etiam non habent propriè neque numeros; Tunchinica certè lingua, de qua nunc agimus, nullas habet coniugationes, tempora nulla aut modos:

(東洋の諸言語、とくに私たちが学んでいる中国語とベトナム語、日本語の一部は、文法が私たちの言語と大変異なっている。これらの言語は例えば、性を全く欠き、数による語形変化もない。とくに私たちが扱うベトナム語は、語形変化も時制も法もない。) (冒頭 1)

ロードは冒頭で、ベトナム語の文法の特徴を、「私たちの言語」(ヨーロッパの諸言語)、中国語・日本語と比べながら述べる。日本語については、性や单複による語形変化がない点で中国語・ベトナム語に似ているが、時制・法があることは認め、日本語の文法は、一部が「私たちの言語」と異なるといったのだろう。日本語のこのような捉え方は、ロドリゲスの『大文典』『小文典』と同様に見える。

日本語の性・数については、『大文典』に「この国語はある点では不完全なものである。何となれば、名詞は格による変化を欠き、单数複数の別及び性の別を持た

ず（後略）」（「例言」^{iiiv} 邦訳5頁）、『小文典』には、「日本語の名詞には曲用がなく、単数も複数もただ一つの語形で表わす。格と数それぞれの違いは、ある種の小辞を名詞のつぎに置いてこれを示す。」（「日本語について心得ておくべき一般的事項」^{1v} 池上訳：上28頁）とある。

日本語の時制については、土井（1982：143-153）のいうように、ラテン文典に倣い「現在・不完全過去・完全過去・大過去・未来・完全未来または確実未来」の六つに分けるが、日本人自身が区別し日本語の固有の語形があるのは、「過去・現在・未来」の三つとしている。法については、「直説法・命令法・希求法・接続法・日本語及びポルトガル語に固有な別の接続法・条件的接続法・可能法・許容法または譲歩法・不定法・動詞状名詞・目的分詞・分詞」の十二とし、日本語に固有な法は『大文典』では「直説法・命令法・接続法・分詞」、『小文典』では「直説法・命令法・接続法・条件法・過去分詞」とした。

一方中国語については、この時期の文法書の現存は知られていないが、1582年マカオに来たリッチは中国語に「冠詞も、格も、数も、性も、時制も、法もない」（1583年2月13日付マカオ発マルチーノ・デ・フォルナリ（ローマコレジオの修辞学教師）宛書簡、Brockey (2007: 247)）と記している。おそらくロードは、先行宣教師から中国語の知識を得、自分もマカオで実際に中国語を学んで、リッチとは同じ認識を持つに至ったのだろう。

次の（11）は、ベトナム語の表記で用いるL字の説明であるが、L（であらわす音）が日本語になく、Rが中国語にないという記述は、（5）であげた『小文典』⁽¹¹⁾と内容も表現も類似しており、『小文典』に基づいていると考えて良いだろう。ロドリゲスは（1）に引用した『大文典』の段階ではまだ、「支那人の持つてゐる文字や綴字で、日本人の発音し得ないものが多数あるが、それは日本の発音には缺けてゐるからである。例へば、Lがそれであり（後略）」のように中国語にRがないという記述は見えない。その後の『日本教会史』では『小文典』と同様、（長さの尺度に）「シナ人は ly [里] を、日本人は里 ry を用いるが、これらは同じ語であって、その発音上シナ人の間では L を、[日本人の間] では R を用いるように思われる」（邦訳上290）のように、相違をより明瞭に意識するようになっている。

（11）L字の説明

L, Est in vsu maximè in principio vt lá, folium; hac autem litera omnino parent Iapones, sicuti Cinenses parent r.

（Lは lá（葉）のように、とくに初めに使われる。この文字は日本語には全

く欠けている。中国語では r が欠けているように。)

(第1章「この言語に基づく文字と音節」5)

上の（10）（11）は、ロドリゲスの著作とロード自身の経験に基づき、日本語や中国語を知る読者に有用な情報として付加されたものと考えられる。

4. おわりに

ロドリゲスとロードの語学書では、彼らの活動地域が日本禁教のため変更された結果、ヨーロッパの言語観の現地語への適用だけでなく、東アジア諸現地語間の比較という相対的な視点がより多く含まれることになった。

本稿では、対象をほぼ『大文典』『小文典』『ベトナム語概説』に絞って論じたが、この範囲内でもまだ検討すべき課題は多い。特に『ベトナム語概説』が『小文典』の影響を受けたことを裏付けるためには、共通する用語の比較など、他の複数の点からの検証が必要である。また東アジア諸現地語に関する記述は、ロドリゲスおよびロードが記した他の資料や、二人以外の宣教師による膨大な資料の中にもみられる。それらを調査することで、本稿で示したような複数の現地語を相対化していく様相が、より明らかになるはずである。

注

- (1) 「アレクサンドル・ド・ロード「ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書」(1651) と日本語」キリスト文化研究会大会および講演会（2017年12月3日於上智大学）。この発表内容はロードの辞書に焦点を絞り、別稿にまとめる予定である。
- (2) 池上訳では「中国の人びとには、逆に L はあるが、〔二重字の〕 R はない」と〔二重字の〕が訳者により補われているが、原文を一字の R と読みとることも可能であり、また中国語のローマ字表記において通常、二重字の RR も一字の R も使用されていないことから、〔二重字の〕は省略した。
- (3) 『日本教会史』では、自筆稿本でもキリスト版ローマ字本であれば Tō (唐) とあるべきところを Toō と書いているように、日本語の綴りさえ厳密ではない（土井 (1982)）。
- (4) 福島 (1983: 299-301) によるとロドリゲスは1630年、山東半島の登州にて朝鮮の遣明使節と会っているが、このやりとりは中国語で行われたと思われる。
- (5) 『日本教会史』第一巻第五・六章によると、山陰道の丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隱岐、山陽道の播磨・備前・美作・備中・備後・安芸・周防・長門の計十六か国を指す。
- (6) ロドリゲスは日本語に限らず、成人の外国語学習では一般に第二の学習法がふさわしいと考えていたように思われるが、第一の学習法を実施していた中国イエズス会を

- 批判することになるためであろうか、そこまで拡大して述べていない。
- (7) 日本・ベトナムに関わる宣教史は五野井 (1992) (2006) (2008) を参照した。さらに、1655年頃のコーチシナ宣教では安南語 (ベトナム語) とともに日本語が用いられていたという (1655年日本管区年報マカオ発ジョアン・ヌーネス、Biblioteca da Ajudada, Jesuítas na Ásia, cod. 49-IV-61, 753v. 阿久根晋氏のご教示による)。
- (8) 川本編 (2011: 1903) による。
- (9) 東京外国语大学本では、概説が辞書の前にある。
- (10) ピナは、Jacques (2002: 24-27) などによると、ポルトガル北部グアルダ出身、19歳でイエズス会入会後、マカオ滞在中ジョアン・ロドリゲスから日本語を学び、約8年間ベトナムのホイアンなどで宣教を行った。ロードの辞書の序文によると、通訳なしにベトナム語で説教したという。
- (11) ロドリゲスとロードがLおよびRについてどのような音価を想定していたかは、ポルトガル語・ラテン語、さらに、日本語・中国語・ベトナム語の、当時のそれぞれの音価を検討する必要がある。本稿では、ロードの記述が『小文典』に極めて類似していることを指摘するにとどめる。

参考文献

- 川本邦衛 (1989) 「A.ロデスと J. L. タペルドの “DICTIONARIUM” について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21、83-105頁
- 川本邦衛 編 (2011) 『詳解ベトナム語辞典』大修館書店
- クーパー、マイケル著・松本たま訳 (1991) 『通辞ロドリゲス—南蛮の冒險者と大航海時代の日本・中国』原書房 (原著 Cooper, Michael. *Rodrigues the Interpreter: An Early Jesuit in Japan and China*. New York: Weatherhill, 1973)
- 五野井隆史 (1992) 『徳川初期キリストン史研究 補訂版』吉川弘文館
- 五野井隆史 (2006) 「16・17世紀ベトナムにおけるキリスト教布教について」『キリスト教文化研究所紀要』22 (1)、49-82頁
- 五野井隆史 (2008) 「ベトナムとキリスト教と日本—16・17世紀コーチシナにおけるキリスト教宣教を中心にして」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』16、41-55頁
- 高瀬弘一郎 (2001) 『キリストン時代の文化と諸相』八木書店
- 土井忠生 (1971) 『吉利支丹語学の研究 新版』三省堂
- 土井忠生 (1982) 『吉利支丹論攷』三省堂
- 豊島正之 (1989) 「ロドリゲス大文典から小文典へ」『国語国文研究』83、79-61頁
- 福島邦道 (1973) 『キリストン資料と国語研究』笠間書院
- 福島邦道 (1983) 『続キリストン資料と国語研究』笠間書院
- 古屋昭弘 (1989) 「明代官話の一資料—リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」」『東洋学報』70、384-360頁
- ルイズデメディナ、ホアンガルシア (1988) 『遙かなる高麗—16世紀韓国開教と日本イエス会』近藤出版社 カオリ
- Bernard-Maître, Henri. (1939) *Pour la compréhension de l'Indochine et de l'occident. Hanoi: G. Taupin.*
- Brockey, Liam Matthew. (2007) *Journey to the East: The Jesuit mission to China*.

- 1579–1724. Cambridge, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press.
- Fernandes, Gonçalo and Assunção, Carlos. (2014) Cuốn Từ Điển Tiếng Việt Đầu Tiên (Rome 1651):貢品字典: 葡萄牙人對東方語文學的貢獻 [The first Vietnamese Dictionary (Rome 1651): Contributions of the Portuguese Patronage to the Eastern Linguistics]. *Journal of Foreign Language Studies*, 41, 3–25.
- Fernandes, Gonçalo and Assunção, Carlos. (2017) First codification of Vietnamese by 17th-century missionaries: the description of tones and the influence of Portuguese on Vietnamese orthography. *Histoire Épistémologie Langage* 39/1, 155–176.
- Jacques, Roland. (2002) *Pionniers portugais de la linguistique vietnamienne* [Portuguese Pioneers of Vietnamese Linguistics]. Bangkok: Orchid Press.
- Phan, Peter C. (1998) *Mission and catechesis: Alexandre de Rhodes and inculturation in seventeenth-century Vietnam*. Maryknoll, N.Y.: Orbis Books.
- Zwartjes, Otto. (2011) *Portuguese missionary grammars in Asia, Africa and Brazil, 1550–1800*. Amsterdam: John Benjamins.

引用資料

- 『落葉集』(1598) (長崎か) Collegio Iaponico Societatis Jesu. (影印 小島幸枝 編1978『耶穌會板落葉集總索引』笠間書院)
- Rhodes, Alexandre de. (1651a) *Dictionarium Annamiticum Lusitanum, et Latinum*. Rome: Propaganda Fide.
東京外国语大学図書館本 <<http://hdl.handle.net/10108/24102>>
- Rhodes, Alexandre de. (1651b) *Catechismus pro iis, qui volunt suscipere baptismum, in octo dies divisus*. Rome: Propaganda Fide.
リヨン市立図書館本 <<https://books.google.co.jp/books?id=QwMQRJVAIU0C&dq>>
- Rhodes, Alexandre de. (1651c) *Histoire du royaume de Tunquin*. Lyon: Chez Jean Baptiste Devenet.
リヨン市立図書館本 <<https://books.google.co.jp/books?id=eTXOdINryx8C&dq>>
- Rhodes, Alexandre de. (1653) *Divers voyages et missions du P. Alexandre de Rhodes en la Chine et autres royaumes de l'Orient*. Paris: Sébastien Cramoisy.
フランス国立図書館本 <<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8607026z/>>
(英訳 1966 Hertz, Solange. *Rhodes of Viet Nam: The Travels and Missions of Father Alexandre de Rhodes in China and Other Kingdoms of the Orient*. Westminster, Maryland: Newman Press.)
- Ricci, Matteo. (利瑪竇) (1605) 『西字奇蹟』北京 (『程氏墨苑』所収 影印 1994上海古籍出版社)
- Rodriguez, Ioão. (1604–1608) *Arte da lingoa de Iapam*. Nangasaqui: Collegio de Iapão da Companhia de Iesu. (影印 土井忠生 解題・三橋健 書誌解説1976『日本文典』勉誠社、邦訳 土井忠生1955『日本大文典』三省堂)
- Rodriguez, Ioão. (1620) *Arte breue da lingoa Iapoa*. Amacao: Collegio da Madre de Deos da Companhia de Iesu. (影印 福島邦道 編1989『日本小文典』笠間書院、邦訳 池上岑夫 1993『日本語小文典』岩波文庫・日埜博司1993『日本小文典』新人物往来社)

- Rodriguez, Ioāo. (1620-ca.1633) *Historia da Igreja do Japão*. (訳注 土井忠生ほか1967, 1970
『日本教会史 上・下』岩波書店)
- Ruggieri, Michele and Ricci, Matteo. (ca.1588) *Dicionário Português-Chinês*. (影印 2001
Dicionário Português-Chinês: 葡汉辞典 (Pu-Han cidian): Portuguese-Chinese dictionary. Editado por John W. Witek. San Francisco: Instituto Português do oriente, Ricci Institute for Chinese-Western cultural history, University of San Francisco)
- Trigault, Nicolas. (金尼閣) (1626) 『西儒耳目資』杭州 (影印 1957文字改革出版社)

[付記]

本稿は、平成30年度大阪大学国語国文学会（2018年1月6日於大阪大学豊中キャンパス）における講演に基づいており、また The 10th International Conference on Missionary Linguistics（第10回宣教言語学会、2018年3月21-24日於ローマ・ラ・サビエンツア大学）での発表とも一部重なるところがあります。ご意見賜った方々に記して感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02341, JP 17H02392, JP15K02573の助成を受けたものです。

(きしもと・えみ 本学准教授)